

男女がお互いを尊重し、その人らしく生きる。
仕事も暮らしも楽しむ。
そんなあなたを応援する情報誌です。

特集

スタイルいろいろ それぞれの ワーク・ライフ・バランス



P6

家族とケアのこれから

～血縁や性差を超えて支え合う～

シリーズ 「小さくなる家族」 ②

P8

講座レポート

「災害とメディア～震災の報道から見えるもの～」

「育児ママの生き方応援講座」

「20代～30代のための

「コミュニケーション力アップ講座」

P9

データ・ウォッチング

「98位(135カ国中)」

日本のGGI(ジェンダーギャップ指数)
の順位

P9

映画に見る女と男

『クレイマー!クレイマー』

P10

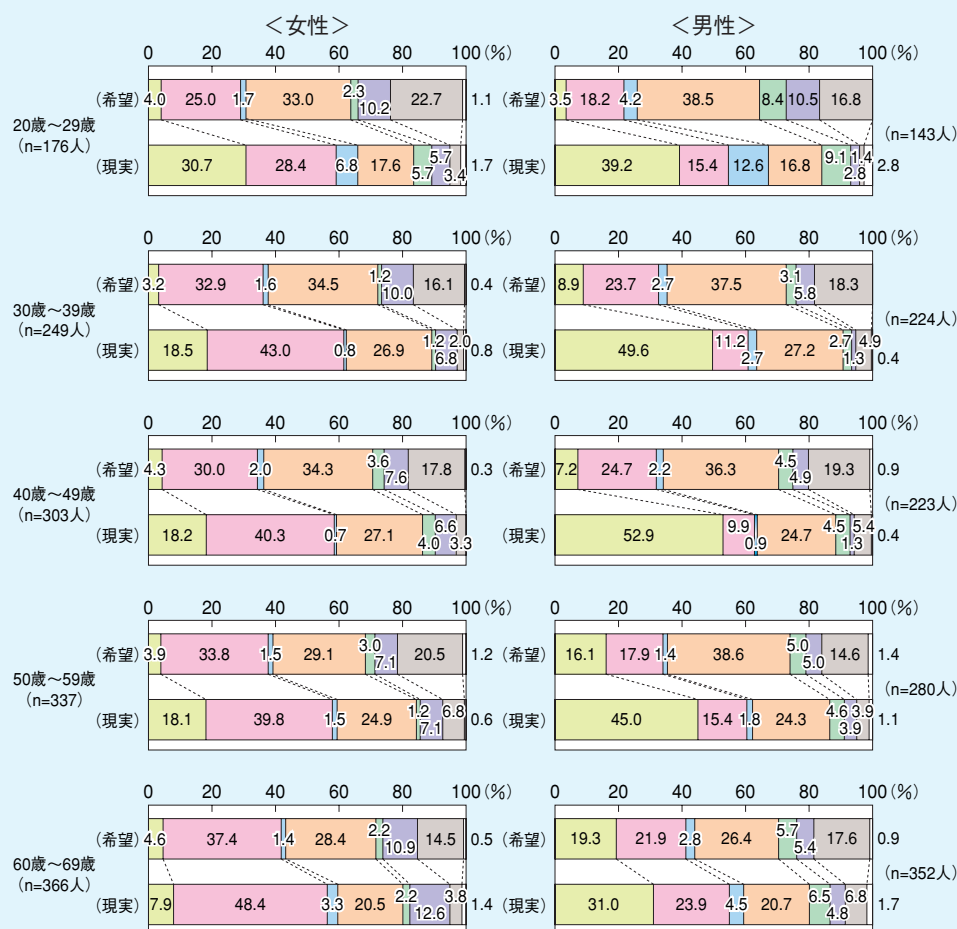
「新宿区第二次男女共同参画
推進計画」(平成24年度～29年度)
ができました

それぞれの ワーク・ライフ・バランス

年齢別にみる 仕事と生活の調和に関する 希望と現実

下のグラフは、生活の中での「仕事」「家庭生活」「地域や個人の生活（学習・趣味・付き合い等）」の優先度の希望と現実を聞いたものです。男女ともに年齢によって優先したいものが変化していますが、いずれの年代も希望と現実ギャップがみられます。

生涯を通じてより良い人生を送るためには、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の視点が大切です。そのあり方は十人十色、ある時期は仕事を、ある時期は子育てを、ある時期は趣味や地域活動などを充実させたいという人もいます。いずれにしても大切なのは、人生の各段階に応じて自分が希望する形で、様々な活動に取り組めることです。それぞれのライフステージに応じてワーク・ライフ・バランスを図りながら、自分らしい生き方を実践している3人の男性区民を取材しました。



優先するもの

- 「仕事」
- 「家庭生活」
- 「地域・個人の生活」
- 「仕事」と「家庭生活」
- 「仕事」と「地域・個人の生活」
- 「家庭生活」と「地域・個人の生活」
- 「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」
- わからない

出典／内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（平成21年）



スタイルいろいろ

それぞれの
ワーク・ライフ・バランス

子育て世代の
ワーク・ライフ・バランス

男性にもできる

「家庭も仕事も」充実させる生き方



渡辺 典明 さん

（40代／会社員）
●家族構成

妻、

長男（5歳）、次男（1歳）

夫として父親として 妻と育児の サポートをしたい

男性に育児参加を促す声が拡がり、イクメン、パパ友などの言葉を耳にする機会が増えました。積極的に育児にかかわるきっかけを探している男性も多いようです。

「2人目が生まれたら、長男の面倒は誰が見るのか？と考えたことがきっかけでした」と語る渡辺典明さん。長男誕生後の妻の大変さを見て、何か手伝えることはないだろうかと思い、一昨年、次男誕生時に14日間の育児休業を取りました。

渡辺さんの会社では社内制度が徐々に拡充。平成22年の育児介護休業法の改正に伴い、妻が専業主婦の場合でも育児休業を取れるようになり、さらに配偶者出産休暇も設けられ、男性社員

の育児休業を支援する仕組みができました。

制度が整ったとはいえ、当時はまだ前例がなく、学生時代からの友人はキャリアに支障が出ると心配しましたが、上司には「仕事のことは心配しないで」と勧められ、部下には「任せてください」と後押しされて、「キャリアにヒビが入ろうといういや！」と決意。渡辺さんは、男性社員の育児休業取得第一号となりました。

育児休業をきっかけに 効率アップした働き方

当時の渡辺さんは新規プロジェクトのリーダー的立場にあり、シヨップを選定するなどの重責も負っていました。仕事を休むことに不安はなかったのでしょうか。

「日頃からリーダーがいなくても仕事

がまわるように仕事の進め方や方向性を共有していたので心配はありませんでした。また、部下の成長を見守ることを心がけていたので、安心して任せられました」

例えば、「楽しく仕事をするのも大事だよ」と伝えたり、「今日できなかったことも明日はできるさ」と力づけたこと、寓話『北風と太陽』の「太陽」のようなコミュニケーションを意識して取るようにしてきたとのこと。渡辺さんの育児休業は、部下にとってさらに成長する機会になったそうです。

一方、育児休業中新たな発見もありました。妻は複数の家事を当たり前のように同時進行させていたことに気づかされました。「妻に代わり家事の段取りや優先順位を考えて行った経験は、仕事で限られた時間内に成果を出す働き方に大いに役立っていると思います」

育児休業の経験を活かしていきたいと働く渡辺さんの会社では、現在、4人目となる男性育児休業取得者が誕生しています。最近では、面識のない社



員からも「育児休暇を取ってどうですか？」などと声をかけられたり、アドバイスを求められたりすることもあり、「いい流れ」が生まれたと、制度を作った総務部でも評判となっています。

働き盛りだからこそ ワーク・ライフ・バランス

夫が育児休業を取ったことについて妻は、「何かを代わりにしてほしいわけではなく、大変な思いをしたときに側にいてくれて、同じ時間を共有できたことがうれしかった」との本音を、後に語ってくれたそうです。

「代わりにするんじゃないかなー」とおどけつつ、「長男は父親とたくさん遊べてうれしかったみたい」と語る渡辺さん。現在は幼稚園への送り迎えや、「子どもの面倒を見るから美容院へ行ってきたら？」と妻に声をかけるなど、家族との関係を一層大切にしています。

「育児休業を機に妻子とのコミュニケーションが増えました。家庭生活が充実していればこそ、仕事でも力を発揮できると実感しています」

平成22年度の男性の育児休業取得率は1・38%。上昇傾向にあるもののごくわずかです。「取得を迷う男性は臆せずやってみて。子育ては人生において最高にクリエイティブだから」とエールを送る渡辺さん。「ゆくゆくは子どもにお父ちゃんの会社で働きたいと言ってもらいたい」と最後に夢を語ってくださいました。

子どもと一緒に地域にとび出して



佐藤 靖徳 さん

(40代/会社員)

●家族構成

妻、
長男(12歳)、次男(9歳)、長女(3歳)

平日は仕事に集中、 休日は地域と家庭

営業職の腕を買われて現在の会社に入ったという佐藤さん。出張が多く帰宅が深夜になることもしばしば、平日は帰ったら寝るだけという生活です。

モータース・サラリーマンに見える佐藤さんですが、実は仕事用のほかにもう一つの名刺を持っています。肩書は「東戸山スリースターズ・ヘッドコーチ」。土日祝日は、少年野球チームのコーチとして予定がびっしり埋まっているのです。

試合のある日は、朝8時から夕方までチームに付きっきり。試合のない日は、4時間くらいが練習で、残りの時間にチームのスケジュールや試合結果の管理・ホームページ更新・個人の成績表作成など、グラウンドではできないことをすること。

「息子たちとは野球を通じてコミュニケーションをとれますが、3歳の娘とは

接点が少ないので、時間のあるときにはなるべく娘の相手をするようにしています。先週も練習の後で、娘とアニメ映画を観に行ったんですよ。その間一人で買物できた、と妻にも喜ばれました」と、家庭生活も大切にしています。

仕事で帰宅が午前0時を回ると、翌朝8時からの練習はさすがに体力的にきついで、忙しい日は少しでも時間があれば眠り、睡眠の確保に努めるそうです。

地域参加の きっかけは子育て

佐藤さんは、小中学生時代に野球、高校ではサッカーをやっていました。

「自分の子どもにもどちらかをやらせたいと思っていました。スリースターズは小学校の前の広場で練習していたので、

長男は1年生で入部したのです。心配で見に行ったときに球拾いなどを手伝っていたら、グローブを持ってきてくれと言われ、1年後にはコーチにならないかと誘われて」

現在、長男が6年目、佐藤さんはコーチになって4年目、次男も所属して3年目になります。妻もお茶当番や応援などで顔を出すことが多く、家族の休日は野球を中心に回っています。お父さんの活躍を目の当たりにしている長男・次男とは、野球の話ばかり。はじめは筋肉痛で翌日の仕事に響いたこともあるそうですが、今ではすっかり「平日は仕事・休日は野球」のペースが出来上がっているようです。

コーチを引き受けてから、対戦したチームの指導者とお酒を飲んだり、地域の「おやじの会」のお手伝いをしたりと、交友関係もどんどん広がりました。人と話すのが嫌いではないという佐藤さんは、「友達が増えて楽しいです。新宿では顔を知られて悪さはできませんね」と笑います。地域での付き合いがあるおかげで、わが子を見守っていてももらえるし、よその子どもを注意することもできるようになりました。

楽しさが見つければ 生活は変わる

働き盛りの男性は子育てや地域の活動に参加できない、という常識を覆す佐藤さん。ポイントは、休日に仕事を持ち込まないこととか。

「遠方への営業が多いので移動時間も使い、仕事は平日に片づけています。アシスタントにできる仕事は任せ、自分のいないときに問い合わせが来ても回る仕組みを作って、仕事の簡素化を図ってきました」

野球の話題がお客様との間を取り持つてくれたり、部下の指導にコーチとしての経験が役立つなど、仕事にもプラスになっていると佐藤さんは語ります。しかし、子どもを参加させても、自分は地域にかかわろうとしない親が多いもの。

「無理な状況の人多いと思います。

私も、できることを楽しんでやっています。面倒なことに思われるのかもしれませんが、時間のある限り人との付き合いを大事にしていると、職場とは違う楽しさを見つけて、生活が楽しく変わっていきます」

平日も休日もとても多忙なはずなのに、佐藤さんには疲れた様子が全く見られません。お子さんの成長やお仕事の変化に合わせ、その時その時のバランスで、これからも充実した毎日を過ごしていけることでしょう。





第二の人生の
ワーク・ライフ・バランス

仕事も家庭も地域活動もあきらめない



清水 浩行 さん

（60代／植木職人）
●家族構成

妻、
長女、次女

その時々で やれることを一生懸命

ワーク・ライフ・バランスは働き盛りだけでなく、あらゆる世代のためのものです。生涯を通じてより良い人生を送るためにはどんなことが大切なのでしょう。

「若いときから仕事に限らずいろいろなことに挑戦してきました」と語る清水浩行さん。実は、元プロ野球選手（大毎オリオンズ、当時）でした。引退後の30代は長野県・諏訪市で暮らし、映画の照明の仕事、建築業、スナックのオーナー、観光人力車などさまざまな仕事に挑戦してきた一方、「諏訪の人たちに御神輿を見せたい」との思いから、浅草から御神輿を調達し、初の『神輿祭り』を開催するなど地域の役に立つ活動なども行ってきました。

地域に根ざした 生きがいのある暮らし

諏訪での仕事も順調で、子どもも生まれ、地域でも活躍していた清水さんですが、42歳のとき東京で暮らす母親の体調が悪くなり、東京に戻ることに。仕事を得るため植木屋に弟子入りし、植木職人となりました。

「東京で出直すことに迷いはなかった」という清水さん。「これまでを振り返り、楽しかったと思えるのは人との出会い。できない状況を言い訳にせず、その時々で自分にやれることを一生懸命やってきました」と語ります。

現在65歳の清水さんは、植木職人として働くかたわら、これまで培ってきた経験を活かし、地域に根ざしたさまざまな活動にも取り組んでいます。

その一つが、四谷4丁目交差点の植

え込みの整備です。

「もともとここは吹き溜まりで、道行く人々の憩いの場になるようにと、自ら許可を申し入れて植え込みを作りました。地域の役に立ちたいと始めた活動ですが、町会から感謝状を頂いたときはうれしかったですね」

季節によって植木を入れ替え、小さな池も造りメダカを放すなど本格的なもので、清水さんは手入れをするのが楽しみでほぼ毎日のように通っているそうです。

また、地元・荒木町の仲間呼びかけて「石だたみの会」を設立、飲食店の石畳を増やして情緒ある路地に整備しようと募金活動を行っています。

かつて花街として栄えた荒木町には昭和30年代に料亭の店主等によって整備された約120メートルの石畳が残っており、路地巡りを楽しむ人たちに親しまれています。



「地域の活性化につながれば良いと思っ

ワークもライフもどちらも 正直に生きるって

さまざまなことに挑戦し、自らの人生を切り開いてきた清水さん。家庭生活においては「自分でできることは自分でやる」をモットーに、妻と協力し合い家事や子育てなども分担してきました。

自分らしいワーク・ライフ・バランスについてうかがってみると、「ワークとライフはつながっているもの。どちらも自分に正直に生きることが一番です」との答えが返ってきました。

第二の人生は地域活動に軸足を置いていきたいと清水さん。「今の自分があるのは今まで出会ってきた人の一言ひと言があるのおかげです」最後にやや照れながら、「何も言わず好きなことをやらせてくれた家族に感謝しています」と語ってくれたひと言が印象的でした。

家族とケアのこれから ——血縁や性差を 超えて支え合う——



柏木 恵子
(東京女子大学名誉教授)

1932年生。東京大学大学院心理学専攻博士課程修了。教育学博士。専攻は発達心理学・家族心理学。

平成22年国勢調査によると、新宿区では一般世帯の平均人員は1.65人でした。家族が縮小を続ける一方、高齢人口はますます増え、育児や介護はどうなっていくのでしょうか。発達心理学の柏木恵子さんに寄稿をお願いしました。

ケアは誰が？

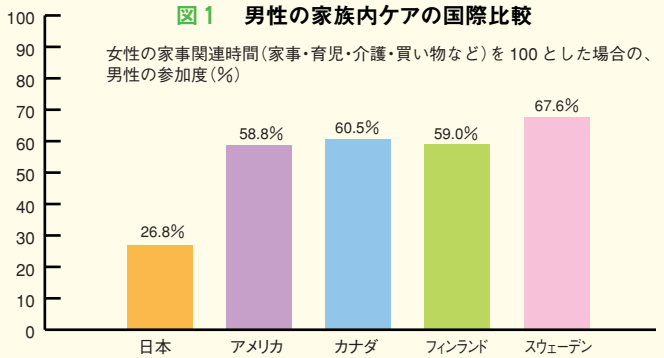
人間の一生は、ケアの視点からみると、万全の世話を受ける「赤ちゃんの時期」、自立し他からの世話を必要としない「成人期」、そして最後に古い病んで世話を受ける「高齢期」から成り立っています。これは誰の一生にも共通です。では、この万人に必須のケアは誰が担っているのでしょうか？

日本では断然、女性です。母として／妻として／嫁として／娘として育児や介護を担っています。これは他国に類のない日本の特徴です。図1をみてください。他国の男性が家事・育児・介護を女性に匹敵するほどしている、これに比べて日本の男性の家事時間（育児・介護を含む）は最低なことが一目瞭然です！

男性はワーク・ワーク、片や女性にはワークあってもケアは担う、これが日本の現状。男性のワーク・ライフ・アン・バランスは明白です。「イクメン」が増えたと評判ですが、実際はわずか、だから話題になるのです。男性の育休取得率は図の下部に張り付いたように少なく、女性の高い取得率とは雲泥の

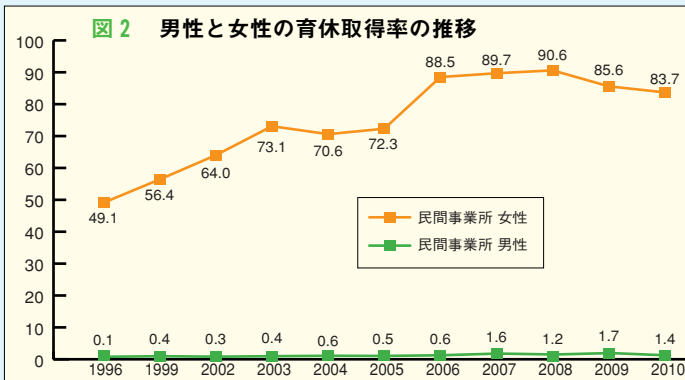
図1 男性の家族内ケアの国際比較

女性の家事関連時間（家事・育児・介護・買い物など）を100とした場合の、男性の参加度（%）



出典／総務省統計局「平成23年社会生活基本調査のほなし」2011年より作成

図2 男性と女性の育休取得率の推移



出典／厚生労働省「雇用均等基本調査」

ケアの女性化の破綻

男性の育児不在の悪影響は

あちこちに

家事・育児に限られません。心理

差があります（図2）。日本の男性は「父親になる」が「父親をする」ことはなく、育児から降りてしまっているといえます。ちなみに、公的な場でも介護・保育・看護などのケア職は女性優位、80%が女性で、男性は職場においても事務・管理職です。

的にも恋愛中に対等にケアし合う関係だったのが、結婚後は「夫はケアされる／妻はケアする」という非対称の関係になってしまいます。つまり、日本の男性はケアされるばかりで、自らケアする体験が乏しいのです。

この影響は深刻です。母親の育児不安は父親（夫）が育児不参加の場合に強い、これは妻の結婚満足度が夫よりずっと低いことにも繋がっています。育児しない父親への子どもの信頼は低く、子の心理的支えにもなり得ません。この

ような妻子への影響は明白そして重大ですが、更に深刻なのは父親自身の発達不全の問題です。

ケアされるばかりで自ら他者をケアする体験の乏しいことは、自分が他者をケアしなければならぬ事態になったとき、切実な問題として露呈します。今でもほとんどの男性は、自分の老後は妻や娘・嫁に介護されると期待しています。けれども、そうはいかなくなりま

した。
先述したように、少子にして高齢化の今日、女性だけがケアラー(※)ということでは済みません。妻が先に病み逝く場合も稀ではありませんでした。そうした事態に直面したとき、ケアする体験が乏しくケアされる立場に慣れてしまった男性は、自分がケアする立場を受容するのが難しく、困惑混乱し無力感に陥ります。

こうしたケアすることの困難が極限に達したとき、虐待に陥ってしまうでしょう。最近、家族介護での虐待が増加していますが、その加害者は息子(が親を)・夫(が妻を)と男性が圧倒的に多いのです。これは男性にケアラーとしての覚悟や資質が欠けていることと無縁ではないでしょう。

解決への道は？

性別しつけの是正

少子高齢化が「ケアの担い手は女性」という従来のかたちを破壊させました。ケアの必要性は大きくなる・長期化する一方、担い手は少なくなる、この問題解決への道・方策は次の二点に集約されます。

①男女ともに

ケアラーになること

男性も女性も、人生は「ケアされる―ケアする―ケアされる」の連続です。いかに稼ごうと、ワーク・ワークで、ケアされるだけの一生はあり得なくなりました。このことは、女性もワークする人生へ向かわせるでしょう。働くことと家族役割(家事・育児・介護)を担うことは、いずれも男女ともに権利であり責務です。その権利の実現が男女ともにワーク・ライフ・バランスの実現につながります。

そのためには、日本の社会に強い『男はしごと』『育児は母の手で』という思い込みを払拭することが大前提です。しごとだけではだめ、育児は母だけではだめなこ

とは、発達心理学・家族心理学が明らかにしています(参考文献参照)。

②日本に顕著な性別しつけ・

教育の是正

性によるしつけ・教育の差別は、今も日本には隠然と存在しています。「学歴は男子に、家事手伝いは女子に」はその一例です。勉強―就職が目標のしつけ・教育で、男子には幼少期はもちろん成人後も母親の家事に依存したパラサイト的生活が続き、ケアされるばかりでケアラーとしての力は未熟です。しかも進学した男子の学業上の適応は必ずしもよいとはいえず、女子の方が勝っています。

「男子だから、女子だから」と性別役割を分化する意味は、消滅しました。十数年前、『今、個性は性を超える』との標語がありましたが、その実現未だしの日本。この実現は急務です。そのためにしつけ・教育の是正は必須の課題です。

社会の変化が人々の生き方に影響しないわけはありません。超高齢・単身社会では、ジェンダーを超えてケアラーとなる、さらに家族・子どもによる介護を絶対視せず、血縁のない他者によるケアを

積極的に受けることが重要です。自立と同時に他者へのケアの心と力をもっている人間が、男性であれ女性であれ、これからの「一人前」なのです。

※「ケアラー」とは、幼・弱・病・老者など援助の必要な家族や知人を無償でケアする人のこと。

参考文献

柏木恵子さんの近著より
ご紹介します。

『子どもが育つ条件』

(岩波新書)



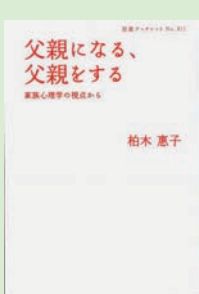
『親と子の愛情と戦略』

(講談社現代新書)



『父親になる、父親をする』

(岩波ブックレット)



「災害とメディア」

「震災の報道から見えるもの」

講師・諸橋泰樹氏（フェリス学院大学教授）

東日本大震災以降、私たちは新聞・テレビ・インターネットなどでたくさんの情報に接しています。放射能関連の報道が目立つ10月8日、メディアが伝える情報を読み解く力をつけようと、23名の参加者が集まりました。

はじめにグループに分かれ、震災後のテレビ報道や公共広告機構のCM、緊急地震速報の音、新聞記事などについて意見交換を行いました。「映像に衝撃を受けた」「信号音が異様に感じた」「教訓になることがあった」「同じ広告が流れ過ぎていた」などの意見が出されました。その後講師からは、「私たちはすべての現場に行くことはできないからメディアを使う情報はメディアにより断片化・改変され、構成されているので、既存のメディア情報の真偽をどう見抜くかが重要だ」というお話がありました。

次に、「メディア情報の真偽をどう見抜いたらよいか？」「ネット情報をどう利用するか？」をグループで話し合いました。「見抜くのは難しい」「情報を鵜呑みにしない」「情報源をいろいろ持ち、新聞を複数購読する」など、活発な意見が出ました。

「科学、経済、政治などについて自分から学ぼうとしないといけない。私たちは都合のいい情報を選ぶ傾向にあるから、いろいろな意見の人と話し合うとよい」と講師。「メディアはスポンサーのものではありません。受け手一人ひとりの責任でメディアに働きかけていく主体性が大切です」ということが心に残りました。



「育児ママの」

「生き方応援講座」

講師・田中喜美子氏（投稿誌『わいふ』前編集長）
斎藤あや子氏（株ママジョブ代表取締役）

定員を大幅に超える申し込みのあった昨秋の「育児ママの生き方応援講座」（全6日）。すぐにでも起業したいという方、育休中で復帰に悩む方、将来を見据えて子育てや仕事を考えたいという方などそれぞれの思いは違っても、「自分のことを語るのは久しぶり」というみなさん。子ども総合センターの研修室はママたちの活気に包まれました。

前期の生き方編では、日本の母親の歴史的背景や「泣けば言いなり」の甘やかし育児が子どもの生きる力を阻んでいる現状に、「目からうろこ」「厳しい話を初めて聞いた」と心が揺さぶられたようです。

後期の働き方編は、働く女性の現状を踏まえ、ママという立場を活かして起業していく具体的な講義内容で、「やる気が湧いた」「グループワークで他の参加者の思いを聞き励みになった」など前向きな声が聞かれました。区役所の保育課による子育て支援情報もあり、一歩を踏み出すために役立ちそうです。

参加された方々は、「5年後のやりたい私」に向かって情報交換し学んでいくと、「ジュエリーエッグス」新宿ママネーゼの夢をかなえる会」を結成しました。これからの活動が期待されます。



「ジュエリーエッグス」結成会の様子

「20代・30代のための
コミュニケーション力
アップ講座」

講師・竹内康代氏（キャリアコンサルタント、臨床美術士）

12月1日、8日、15日の計3回にわたり実施されたこの講座は、「自分の言葉で伝える自信をつけよう」と題し、アサーティブを楽しく学ぶことを目的としています。アサーティブとは相手を否定することなく自分の意見を言うことを主とするコミュニケーション方法の1つです。

1回目の講座では、1人20秒の自己紹介を行い、皆でコミュニケーションの疑問や困ったことを話しました。2回目の講座では、「自己主張するにはまず傾聴から」ということで、2人1組になって傾聴体験をしました。まず、話し手が話を始めても聞き手はうなずいたりせず、まるで無関心を装います。時には目も合わせないの、話し手はとても辛い気分になります。「傾聴とは心を傾けて聴くことで、聞き手の笑顔や目線、うなずきがあるからこそ話し手は安心して話ができる」と説明がありました。3回目の講座では、不毛な地域で生き残った場面を想定したサバイバルゲームを素材に、個人での選択と参加メンバーとの選択の違いなどを話し合いました。そして、学んだアサーティブを今後どのように生かしていくかをそれぞれ述べて終了しました。

講座を通して印象的に感じたのは、竹内先生の「自分を好きになると、相手も好きになれる」という言葉でした。幾度となく聞く言葉ではありますが、自分の良いところを探し、自己信頼を高めると、自然に相手への信頼につながっていくのだと思いました。



データ・ウォッチング

「98位」

日本のGGI (ジェンダー・ギャップ指数) の順位

政治・経済で低い 女性の参画

4つの算出項目をみてみると、「健康・寿命」では1位の日本ですが、労働力率、賃金格差、管理職に占める比率などから算出される「経済参加」では100位、国会議員や閣僚に占める比率などから算出される「政治的エンパワメント」では101位となっており、特に政治・経済の格差が順位を下げる要因

ジェンダー・ギャップ指数 (GGI) は、男女格差を測るもので、「経済参加」「教育」「健康・寿命」「政治的エンパワメント」の4分野から算出されます。2011年の日本の順位は135カ国中98位でした。先進国の日本が大きく遅れをとっている理由は何でしょう。

GGIにおける日本の順位

総合順位	国名	分野	日本の順位
1位	アイスランド	経済参加	100位
2位	ノルウェー	教育	80位
3位	フィンランド	健康・寿命	1位
19位	アメリカ	政治的エンパワメント	101位
98位	日本		

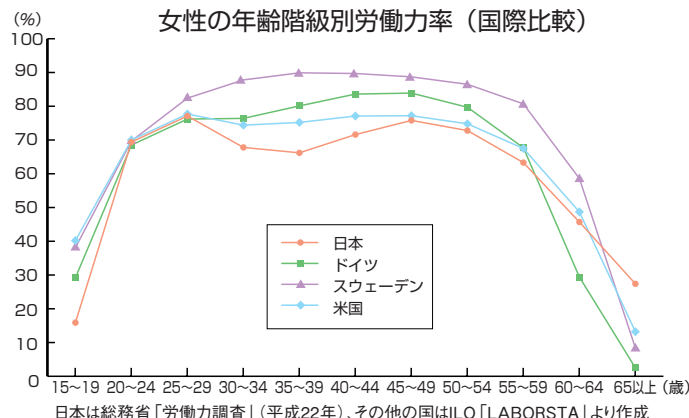
世界経済フォーラム「The Global Gender Gap Report 2011」より作成

子育て期に低下する 女性の労働力率

ここで注目したいのが、経済参加の順位を下けている要因の一つ、女性の労働力率です。「女性の年齢階級別労働力率」の国際比較をみると、日本は特に30代・40代が低く、子育て期に仕事を中断していることがわかります。

仕事の中断はキャリアの継続につながらず、役職や賃金の格差も縮小しません。子育て等で仕事を辞めた女性の再就職を希望する声は多く、こうした働く希望のある「潜在的労働力率」を加えると、子育て期の女性の労働力率は上がるという国のデータも出ています。

女性の年齢階級別労働力率 (国際比較)



大切なのは意識と行動力

女性のキャリア継続のためには、仕事と子育ての両立支援はもちろんのこと、職場復帰や再就職しやすい環境などが求められます。同時に私たちが声を上げ、一歩踏み出すことで解決のスピードは速くなるはず。大切なのは私たちの意識改革と行動力です。男女が性別によって差別されず、同じ水準で生きられる環境づくりは一人ひとりの幸せにつながります。周りを見れば減っているように見える差別も、世界と比較すればまだまだ解決すべき課題が見えてきます。

映画に見る 女と男

『クレイマー・クレイマー』

監督/ロバート・ベントン
出演/ダスティン・ Hoffman、メリル・ストリープ他
(1979年公開)



(株)ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
©1979 COLUMBIA PICTURES INDUSTRIES, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

仕事一筋のテッド・クレイマー。妻のジョアンナ・クレイマーは専業主婦。働きたいジョアンナは夫の理解が得られず、幼い息子を残し家を出ていきます。仕事、子育て、家事に悪戦苦闘する中でテッドは「父親をする」ことの喜びを見出します。

やがて夫婦は子どもの養育権を巡り裁判で争うことに。タイトル「クレイマー・クレイマー」は夫婦の裁判にちなんでいます。当初、養育権はテッドに。一方、ジョアンナは母性を盾に養育権を主張。結局、「子の最善の利益の原則」によりテッドは敗訴します。

父との別れの日、息子は泣きじゃくります。父子の絆を目の当たりにし、息子を引き取れないと感じるジョアンナ。果たしてこの家族の結末は？ 映画は観客に委ねる形で終わります。

訴訟社会アメリカとはいえ、30年以上前に女性の社会進出、性別役割分業意識、父子家庭、子の養育権をテーマにした映画が公開されたことに驚かされます。日本では「イクメン」が登場し、言葉の上では男女平等が浸透しつつあります。多様な家族が当たり前を受け入れられる日が待ち遠しいとこそです。

「新宿区第二次男女共同参画推進計画」ができました

(平成24年度～29年度)

この計画は、新宿のまちに住む人々はもとより、新宿で働き、学び活動するすべての男女が、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮し、責任も分かち合い、共にあらゆる分野に参画することのできる社会を実現するため、「新宿区男女共同参画推進計画」(平成20年度～平成23年度)に引き続く計画として策定しました。



5つのビジョンと総合ビジョン

新宿区がめざすものは、**男女が、すべて人として平等であり、個人として尊重される社会を実現すること**です。その総合ビジョンとして、「**男女が個人として尊重されるまち新宿**」を掲げ、具体的ビジョンとして5つのビジョンをまとめました。

- ① ワーク・ライフ・バランスが実現するまち
- ② 個性と能力を十分に発揮できるまち
- ③ あらゆる暴力のない、尊厳を持って暮らせるまち
- ④ 誰もが公平に参画できるまち
- ⑤ 協働により創意工夫するまち

5つの目標とキャッチフレーズ

5つのビジョンの実現に向けて、5つの目標を設定しました。

目標1 ワーク・ライフ・バランスの推進 へともにあう

◆ すべての区民や企業がワーク・ライフ・バランスを実現することをめざします。

目標2 多様な生き方を認めあう社会づくり へともにあう

◆ 性別で役割を決めることなく、男女が互いに認め合う姿をめざします。

目標3 人権の尊重と配偶者等からの暴力のない社会の実現 へともにあう

【新宿区配偶者等暴力防止及び被害者支援基本計画】

◆ 配偶者等からの暴力をなくすことをめざします。

目標4 あらゆる場面における男女共同参画の推進 へともにかがやく

◆ 男性も女性も、自分の個性を発揮できる新宿区をめざします。

目標5 計画の推進に向けて へともすすめる

◆ あらゆる機関と協力することで、男女共同参画社会の実現をめざします。

計画のポイント

計画の実現に向けて…

- ・ **5つのビジョンと総合ビジョン**を掲げました
- ・ **目標ごとにキャッチフレーズ**を決めました
- ・ 配偶者等からの暴力の問題に取り組むため、「新宿区配偶者等暴力防止及び被害者支援基本計画」を一体的に策定しました

計画の全文とお寄せいただいたご意見(総数14件)と区の考え方は、男女共同参画課(男女共同参画推進センター・ウィズ新宿)(荒木町16)、子ども家庭課(本庁舎2階)、子ども総合センター、広聴担当課(本庁舎3階)、区政情報センター(本庁舎1階)、特別出張所、区立図書館で閲覧できます。新宿区ホームページでもご覧いただけます。

新宿区協働事業提案制度実施事業

「赤ちゃん木育ひろば」

「赤ちゃん木育ひろば」は、東京おもちゃ美術館の1階にあります。国産の木材に囲まれ、木のおもちゃに触れたり保護者同士やボランティアの赤ちゃん木育サポーターと話をし、親子でリフレッシュできる空間です。



赤ちゃん木育ひろばの象徴である「スギコダマ」は、トンネルやすべり台として設置されています。ボランティアの方々が一つひとつ削って4種類のヤスリで磨いた「ミニスギコダマ」は、緩やかなカーブでなめらかな肌触りです。



赤ちゃん木育ひろばは、親子でゆっくり過ごせるよう、利用できるお子さんは2歳まで。区内在住・3歳未満のお子さん1名につき大人1名は、「新宿区民平日パス」で東京おもちゃ美術館に平日無料で入場できます（パスの発行にはお子さんの住所・年齢を確認できるものが必要です）。

東京おもちゃ美術館は、赤ちゃん木育ひろばのほか、幅広い年齢の方が楽しめる施設となっています。

【問合せ】

東京おもちゃ美術館

四谷4-20（四谷ひろば内） ☎ (5367) 9601

新宿区立柏木子ども園 を紹介します

平成23年4月に柏木幼稚園と北新宿第一保育園を統合して開園。平成24年4月からは、定員を拡充するとともに一時保育を開始します。

柏木子ども園は

0～2歳児は柏木特別出張所2階の乳児園舎で、3～5歳児は柏木小学校併設の幼児園舎で、保育・教育を行う分園方式の認定子ども園です。

家庭生活との連続性を大事にし、「心もからだもたくましい子」「自分で考えやってみようとする子」「豊かに感じる子」を育てることを目標にしています。



〈幼児園舎保育室〉

子育てをサポート

地域に開かれた子育て支援として、子育て相談を実施。4月からは一時保育のほか、未就園児親子の交流の場「カンガルークラブ」もスタートします。

【問合せ】新宿区立柏木子ども園

乳児園舎・北新宿2-3-7 ☎ (3369)5855
（柏木特別出張所2階）

幼児園舎・北新宿2-11-1 ☎ (3227)2118
（柏木小学校併設）



本の紹介

『パパと怒り鬼』

—話してごらん、だれかに—

作／グロー・ダーレ

絵／スヴァイン・ニーフース

共訳／大島おり 青木順子
／ひさかたチャイルド社



DVを子どもの視点でとらえた絵本です。絵で語り、活字は多くありませんので、誰でも読みやすい入門書としておすすめです。

ボイは、普段は大好きなパパだけれど怒り鬼のとりついた時のパパからは逃げ出したいと思っていました。ボイが不安と孤立を深めていく中、王様に手紙を書くことでパパの心が変わる道が開けます。

傷ついた子どもが大人になりいつのまにかパパと同じ事をしてしまわないためにも、大人は子どものSOSに気づかねばなりません。DVを受ける側にも、DVをしてしまう側にも、大事なことがわかる一冊です。

『ストップ！デートDV』

防止のための恋愛基礎レッスン

著者 伊田広行／解放出版社



普通の恋愛が危ない！デートDVをなくすには、恋愛の在り方から考え直さなければなりません。著者はさまざまな事例をあげて、束縛をよとするような恋愛の在り方に疑問を投げかけます。「別れに同意はしない」「嫉妬の権利はない」と、DVにならない「新しい恋愛」をわかりやすく説いています。ドラマなどメディアによるデートDV容認の風潮も指摘し、DVは社会の問題でもあるということがわかります。

「ケータイによる束縛にはどうしたらいい？」などQ&Aもまじえ、読み応えのある恋愛入門書となっています。

『ケッコン構造改革のススメ！』

新・男と女の掟62+1

著者 諸富祥彦／実業之日本社



「結婚」に自分を合わせるのではなく、自分の望む人生に合う形の結婚を選び取ってほしい、と幸せを願う女性にエールを送る著者。従来の家族制度や男女観、結婚に関する法律の制約を受けずにオリジナルな男女関係を目指す秘訣を、62の掟でユーモア交りに解説。最後には漫画家倉田真由美さんと著者の対談もプラスされています。秘訣のカギは、自分らしさの上に成り立つ女らしさ男らしさと、二人の自立した関係にあるようです。

「結婚」について何らかのプレッシャーを感じる方だけでなく、子どもの結婚にやきもきする方にも読んでほしい一冊です。

平成24年度編集委員 『ウィズ新宿』を いっしょにつくりませんか

プロ編集者の指導のもと、男女共同参画について学びながら情報誌を作成します。「取材をしてみたい」「記事を書きたい」「写真やイラストが得意」そんなみなさんのご応募をお待ちしています。

応募資格 土曜日(月1~2回、募集要項または
広報3月15日号参照)の編集委員会に
出席できる方。
区内在住または在勤・在学、18歳以上。

募集期間 平成24年3月15日(木)~4月10日(火)

募集要項は男女共同参画推進センターの
ほか、区内図書館・出張所・地域センター・
新宿区ホームページで。

【問合せ】男女共同参画課

☎(3341)0801



しんじゅく女性団体会議

区内女性団体の連携と女性のエンパワーメントをめざし、年6回の定例会を行っています。現在11団体が活動中。平成23年度は「次世代育成」をテーマに、下記の研修を実施しました。



・研 修

「男女共同参画と次世代育成について」男女共同参画課
「子ども家庭をとりまく状況と課題について」新宿区子ども総合センター

・講 演 会

「子どもたちの健康と食の安全～いまできること・これからすべきこと」
講師・南 清貴

・公 開 講 座

「プロパガンダとジェンダー～女性映画監督第一号
坂根 田鶴子の『開拓の花嫁』を読み解く」
講師・池川 玲子

・日帰り研修会

神奈川県立 かながわ女性センター&地球市民かながわプラザ(あーすぶらざ)

ただいま新規団体を募集しています(3月17日締切)。
詳しくは男女共同参画課 ☎(3341)0801へ。

● 111号の編集を終えて ●

仕事も家庭も充実させている方は、熱い心と何でも楽しむ技術、エネルギーいっぱいの体力をお持ちのようです。そうした個性や心に残った言葉を伝えるために、「」の使い方の指導を受けたことは、とても勉強になりました。

取材に協力して下さった方の素敵な人柄だけでなくパワーも、みなさまに届いていたら嬉しいです。
(五十嵐 ゆき)

ワーク・ライフ・バランスについて幅広く深い学びの場をいただきました。また、新宿区には多文化共生都市にふさわしい様々な学びの場があることを改めて感じました。

今後は区民として引き続きこの学びを深めていきたいと思います。男女共同参画に関わる皆様、ウィズ新宿の皆様には大変お世話になりました。
(魚見 賢太郎)

男女格差をテーマにしたデータ・ウォッチングを担当しました。数字にすると色濃く表れる男女格差ですが、どれだけの人が肌で感じ、当事者として考えているのでしょうか。より成熟した共生の社会を作るには、性別や人種、年齢などの「違い」をどう受け入れていくのが鍵になると思いました。私も当事者の一人として考え続けていきたいと思っています。
(大井田 亘)

編集委員として参加させていただき文章をまとめる大変さを実感し、編集って奥が深いんだと改めて感じさせられました。働く人やママであるというだけでなく社会に参加できたことが有意義だったと思います。

今後もこの経験を生かし、ワーク・ライフ・バランスなど自分らしい生き方を試行錯誤していきたくと思います。
(木村 華苗)

仕事中心の生活が当たり前とされてきた今までの価値観を振り返って、生活とは何か、人間の尊厳とは何か、ということをも日本全体が考えなくてはならない時期にきていると思う。一人ひとりの意識が変わり、社会を変えていくことで、誰もが安心して無理なく働き、子育てや地域活動、趣味などを楽しむ生活スタイルは実現可能だということを声を大にして言いたい!!
(原田 拓磨)

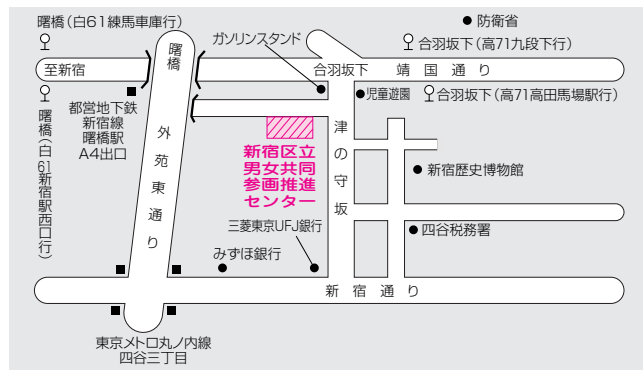
普段から文章を書く機会がありますので、ウィズ新宿の原稿を書くことに対して当初、心配はしていませんでした。しかし、自分の出来事と異なる特集記事や講座感想文等をいざまとめるとなると、なかなか筆が進みませんでした。

それでも、様々なアドバイスをいただき、無事に終えることが出来ました。文章を書く難しさと共に書く楽しさも改めて感じた一年でした。
(渡邊 智子)

編 集 後 記

立場や経験の異なるメンバーが集まると、視野が広がり考えが深まるものと、一つひとつの記事をめぐって話し合うたびに実感しました。そんな編集会議を重ねて生まれた今号ですが、心に響くページはあったでしょうか。

表紙の写真、特集の取材は多方面のお力をお借りしました。ご協力いただいたみなさま、どうもありがとうございました。



発行 新宿区子ども家庭部男女共同参画課
新宿区立男女共同参画推進センター
〒160-0007 東京都新宿区荒木町16番地
TEL(3341)0801 FAX(3341)0740



発行日 平成24年3月7日